

平塚柔道物語 7 2

## 上水東海大監督の魅力

平塚柔道協会 会長 奥山晴治

全日本柔道無差別チャンピオンの王子谷選手の話は、さらに続いた。「上水監督の武道ゼミを受けた時のこと。監督に『勝負哲学の本を読むといいよ』と言われ、野球の好きな私に野村監督の本を薦めたのです。私はその本を読むことによって、人間の本質や勝負哲学を初めて学ぶことができたのです。全日本の大会の前日も、本を読み、リラックスして試合に臨むことができました。これも上水監督のお陰で、今では読書も楽しみの一つになりました」と淡々と語る王子谷選手を通して、上水監督の指導法や指導力が目に見えるようであった。その後、当協会出身的那須君にも聞く。「監督はどういう人か」彼は一言、「静かな闘志の方で、私達に生き方の大切さを教えてくれます」と答えた。そのあと私は直接上水監督と一時間半に渡り懇談したのです。

私は初めて会った時からひとかどの人物とは思っていたが、それ以上に深みのある大人物であった。監督との対話から、人間教育に対する彼の熱い思いが私の心に強く伝わってきて、思わず胸が詰まってしまった。そこで、その内容をここに紹介しようと思う。

「私は学生によく言うことは、生きることを大事にしてほしいと言うことです。他の国々の人達を考えてみると、明日にもわからない命の方もたくさんいるのです。それに比較して、皆さんはどうか？ 一日一日を大切に、精一杯生きようとしているのかと、常に生きる大切さを訴えています」と。また、勝負哲学についても話してくれた。「中国の孫子の兵法書の中に『兵は国の大事、存亡の道、死生の地、察せざるべからず』とあります。これは、存亡の危機の時、指導者は、よくよく考えて決断せよということです。孫子は生き残るのは二者択一である。だから、気が狂うほど考えよ。そこまで考えて丁度よいと言っています。柔道も同じなのです。私達も、仮に勝ったとしても、次はどうかなのか、勝ったことによって先が見えなくなることもある。同じように成功するとは限らない。過去の成功体験も、あてにならないので、頼れない。連続して勝つことは至難である。力

があっても負けるかも知れない。いや負けるはずがないと言っても、次は何が起きるかわからない。考えて考えていくとわからなくなる。でも目を逸らしたらだめだ。だから準備をするのだ。私は臆病だから、心配することへの準備の引き出しをたくさん作っています。最悪のことを想定し、あらゆることに備えた準備の引き出しです。本番で、積み重ねて来た準備の引き出しを、どれだけ使えるのかが勝負の要諦なのです。このことを、私は監督として、いつも意識しています」と。私は企業経営や危機管理の理論に、そのまま通じると思った。その独創的手法こそ、前人未到の記録更新を始めとして、数年先を見越したチーム作り・選手の育成であったのであろう。

さらに監督の話は続く。「『私は試合結果が、勝てばよし、負ければだめ』という考え方は好まない。勝つ人は一握りの人である。人は負けることによって、いろいろなことに気が付き、学ぶことができる。柔道の勝負も人生の凝縮したものとも言える。なかなか結果が出ない。思う通りに行かない。しかし、その時・その時の適応力を常に学んでいるのである。だから、勝つことだけでなく、目的に向かって挑戦していく行動力が尊いのです。できるだけ、質の高い努力をしていくことだ。そうすると、負けたとしても、多くのことを学ぶことができる。一回限りの人生を大事に使うて欲しい。柔道の大会も自分達が生きていることを証明する舞台なのだ」と訴えています。

上水監督の話は、大変にわかり易く、一言一言に深みがあり、心の中に入ってくるのは何故か、それは、彼の実体験に裏付けられたものだからであろう。

— 続く —



上水東海大監督と筆者